日本人は表情から本音と建前の感情をどのように認知するのか？

—喜びと怒りの段階的モーフing表情画像を用いた検討—

○曹蓮¹ 杉森伸吉²

(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科1 東京学芸大学2)

Key words: 感情認知, 表情, 日本人

目 的

日本人はネガティブな表情表出を抑制したり、微笑みなどのポジティブな表情で隠したりする傾向がある。このような表示規則を持っている日本人は、相手の表情から本音と建前の感情を認知するのに異なる解釈規則を用いるのか。本研究では、このような日本人の解釈規則について検討するために、怒りと喜びの表情刺激を用いて、人物が内心で感じられている感情と表情そのものに表れている感情について、それぞれ評定するよう求める課題を用いた。具体的には無表情から怒りあるいは喜びの感情を明確に表す表情までの静止Morphing画像を刺激として用い、感情強度の評定課題を実施するオンライン実験を実施した。

日本人はネガティブな表情表出を抑制する傾向があるため、相手の感情を解釈する際には、表情そのものに表れている感情より、内心の感情をより強く評定すると考えられる。一方、喜びの表情、特に曖昧な喜びの表情は、ネガティブな感情を隠すために表す場合があるため、解釈する際には表情そのものに表れているものより、内心の喜びの強度を弱めて評定すると考えられる。

方 法

■参加者： 日本人大学生 10 名（男性 2 名、女性 8 名、平均年齢：20.2）を対象にした。

■刺激： 刺激は曹・杉森・高（2020 印刷中）で用いた女性 1 名の表情を用いた。具体的には、喜びと怒り、中立の表情を用いて、Morphing 手法で中立表情から喜び、あるいは怒りの表情に徐々に変化していく 15 段階の表情刺激（計 29 個）を作成した。Morphing 画像における表情の混合割合は、変化量がほぼ一定に段階的に変化するように設定した。

■手続き： どのような感情を、どの程度強く認知するのかについて、表情そのものから判断する場合と表情から人物の内心の感情を判断する場合の違いを検討するために、「表情の判断課題」と「内心の判断課題」を行った。具体的には、怒り、喜び、驚き、悲しみ、恐れ、嫌悪のそれぞれの感情について、「0:0%まったく感じられていない(or 表れていない)」と思うから「10:100%非常に感じられている(or 表れている)」と思うの 11 件法で回答を求めた。課題の間にカウンターバランスを取って実施した。

結 果と考 察

日本人が怒りあるいは喜びの強度が多様な表情から感情を判断する際に、内心の感情判断と表情そのものの判断に違いがあるのかを検討するために、感情ごとに 2(課題：内心、表情) × 15(感情段階)を独立変数、感情強度の評定得点を従属変数にした参加者内 2 要因分散分析を行った。その結果、感情種類に関わらず、感情段階の主効果のみにおいて有意であり ($F_s < 26.51$, $p < .01$), 内心と表情の課題間には違いが見られなかった (図 1 と図 2 を参照)。さらに、怒りの表情だけでなく、喜びの表情からも感情価が異なるネガティブ感情(嫌悪と恐れ、悲しみ)が混同して認知される傾向が示された (図 3 と図 4 を参照)。上述の結果より、日本人が相手の表情から本音と建前の感情を認知する解釈規則には、違いが見られなかった。しかし、日本人は喜びの表情、特に中程度の Morphing 段階の曖昧な表情から、ネガティブ感情が認知されやすいの

は、前述のような日本人の表示規則と対応していると考えられる。本研究は参加者の少人数およびオンライン上の回答環境の違いなどによる影響が考えられるため、今後これらの改善による再検討が必要であると考えられる。

図 1 怒りの感情強度の評定得点。

図 2 喜びの感情強度の評定得点。

図 3 怒り以外の感情強度の評定得点。

図 4 喜び以外の感情強度の評定得点。

(Lian CAO, Shinkichi SUGIMORI)